

巻 頭 言

校長 谷口 研二

3年前、入学式を終えた初々しい新入生と一緒に桜の下で記念写真を撮っていたことは昨日のように思い出します。緑豊かな矢田丘陵の山並みを背景に、頭上の青空に白い雲がくっきりと浮かんでいました。実は、私にとってあの入学式は、新入生と同様、とても大きな出来事でした。赴任したその日に祝辞を述べるのはとても緊張することで、この緊張感が当時の状況を鮮明な記憶として残しているのでしょう。しかし、こんなに鮮明に記憶される出来事は稀で、ほとんどの場合、すぐに忘却の彼方に消えてしまいます。ひどい場合には経験した出来事が、脳の中で、自分にとって都合良く再整理されて、それが真実として記憶に刻み込まれることもあります。

人の記憶は、時間が経つと曖昧になるので、記憶や情報を正確に伝える手段として「文字」が発明されました。文字が無かった先史（縄文、弥生）時代には先人の知恵は記憶を通して細々と伝承されていましたが、文字を持つエジプトや中国などに比べてその伝承量は圧倒的に劣っていました。この差を詰めるべく、奈良時代、国家事業として中国の文物がわが国に持ち込まれました。なかでも遣唐使が持ち帰った仏典は高僧だけが手にできる貴重な書物でした。この書物には中国やインドの長い歴史の中で育まれた知恵に溢れており、当時の知識人にとって学問の拠り所であったと思われます。その頃、お寺は、書物を保管する図書館、知識人を育てる教育機関としての機能を果たしていました。

さらに1000年ほど後の江戸時代末期、鎖国政策で世界の潮流に乗り遅れたわが国では、若者が命を賭して禁書を手にして、海外の知恵・知識を貪欲に取り入れようとしていました。こうして西欧の自由な思想に触発された若者が倒幕運動を起こし、明治維新を迎えることになったのは周知の通りです。いずれの例でも、先進的な情報を入手するため、人命を賭してまで情報収集に奔走した時代があったのです。

今では図書館や書店が全国津々浦々にあり、どこでも本が簡単に入手できる幸せな時代になりました。さらに、容易に情報にアクセスできるインターネットも普及してきましたが、厳選された質の高い情報は相変わらず書物から得られることが多いのも事実です。

皆さんは日本の歴史発祥の地に住み、そこで学んでいます。その絶好の機会に奈良の歴史をもっと知って欲しいと願っています。そのために必要な資料は図書館にあります。私自身、図書館にある書籍を借りて、通勤の間、読書三昧できる幸せを感じながら、奈良に縁のある本を次々と読みました。奈良には古代の地名が今なお数多く残っており、飛鳥時代や奈良時代に想いを馳せながら歩いていると、まるで自分がその時代を生きているように感じました。

もちろん、奈良以外の文化、政治、哲学、海外旅行などに関しても、図書館には皆さんの知的好奇心を満たす資料も十分に揃っています。

高専生活は、授業や課外活動だけではありません。先人の思想が詰め込まれた宝庫の図書館を有効に活用して、知性豊かな大人になってくれることを期待しています。

多読表彰について

【クラス多読表彰】

クラス多読表彰は、図書館の統計に基づき、一人当たりの貸し出し冊数の多いクラスを表彰し、これを機に学生が一層図書館を活用することを期待するものです。なお、表彰されたクラスには副賞として、希望図書を購入ができる権利を贈りました。



第1位	機械工学科4年	(32冊/人)
第2位	機械工学科5年	(29冊/人)
第3位	電子制御工学科3年	(23冊/人)
第4位	化学工学専攻1年	(22冊/人)
第5位	物質化学工学科3年	(17冊/人)

【個人多読表彰】

個人多読表彰は、図書館の統計に基づき、貸し出し冊数が多い学生個人を表彰し、これを機に学生が一層図書館を活用することを期待するものです。なお、表彰された学生には副賞として、図書カードを贈りました。

第1位	機械工学科5年	松本 葵さん	第6位	機械工学科4年	鈴木耕太さん
第2位	機械工学科4年	石田 豊さん	第7位	物質化学工学科4年	中澤廣宣さん
第3位	機械工学科4年	田端信哉さん	第8位	情報工学科1年	森田悟大さん
第4位	電子情報工学専攻2年	岸本 光さん	第8位	物質化学工学科3年	吉田 航さん
第5位	機械工学科5年	北園一将さん	第10位	電子制御工学科3年	金井達哉さん

表彰式は1月5日（月）昼休みに校長室にて行われました（5ページの写真をご覧ください）

図書購入リクエスト、随時受付中！

図書館カウンターに用紙及び投函箱を設置しています。図書館ホームページからもリクエストを送ることができます。（HOME > 資料検索 > 推薦（希望）図書）読みたい本、図書館に置いてほしい本があれば、是非リクエストをしてみてください。

ただし、無条件に購入できるわけではないので注意してください。

〔例：ライトノベルの4巻以降、楽譜、漫画等は不可等〕



平成 26 年度

読書感想文コンクールを終えて

情報メディア教育センター運営委員会

第39回を迎えた校内読書感想文コンクールの審査結果を発表します。1年生から4年生まで合わせて今回358編の応募がありました。情報メディア教育センター運営委員会の教員7名と一般教科の国語担当教員4名の計11名による厳正な審査と投票を経た結果、最優秀賞1名と優秀賞7名の計8名の入選を決定しました。ここに入選者の氏名と読書感想文のタイトルを掲載し、その榮譽を称えます。

最優秀賞

物質化学工学科1年 三雲 理紗 「生きること－『晴天の迷いクジラ』を読んで」

優秀賞

機械工学科1年	永岡 颯太	「アイデアの種」
情報工学科1年	矢野 真綾	「『8分音符のプレリュード』を読んで」
機械工学科2年	田村 直人	「応援し、応援されること」
機械工学科2年	中村 友哉	「理想と現実、そしてその先」
情報工学科2年	石田 豊実	「できることを－『舟を編む』を読んで」
情報工学科2年	林 大泰	「『死んでも死なない』という決意」
物質化学工学科2年	森 貴典	「目標を持つことの重要性」

また、惜しくも入選には至りませんでした。審査の過程で優れた評価を得た作品16編について佳作としました。以下に、氏名を紹介し、その努力を称えます。

佳作

1 M 伊東 聡	1 E 内田 啓太	1 E 出井 秀征	1 E 峯島 基
1 S 木田 圭祐	1 S 百歩 明	1 I 國貞 浩良	1 C 谷本 陸
2 E 紀伊 凜香	2 E 辰巳 幸弘	2 S 津田 航汰	2 S 大西 和真
2 S 丸本 壮起	2 C 平地 由佳	2 C 濱邊 幸奈	4 C 隅谷 大良

さて、読書感想文とは、本を読むことによって心に生まれた感想や感動、印象や疑問などを書き表した文章をいいます。私たちは、読書をして読書感想文にまとめることで本の内容をより深く理解することができ、また、その結果、内容について新しい解釈や気づかなかった自己発見をすることが可能となります。

そこで読書感想文では、まず、どのような本を読むかが最初のポイントになります。その意味で、本との出会いは人との出会いに似ています。出会いのチャンスは至る所にありますが、よい出会いというのは自ら求めるところを訪れます。そして、読むべき本と出会えば、あとは読み続けることで本の世界に入り込んでいくことができます。

今回、最優秀賞を受賞した三雲さんは、窪美澄著『晴天の迷いクジラ』という本と出会いました。そして三雲さんは、死を決意した登場人物3人が湾に迷い込んだクジラを見ようと行動を起こし、出会い、絆を深めていく奇跡に対し、羨望し、嫉妬を感じます。また、登場人物の1人の正子とその友人である忍の関係を、中学時代に病と闘いながらいつも笑っていた友人と自分の関係に重ね合わせ、当時、自分が行動を起こさなかったことを後悔する一方で、自ら行動を起こすことで状況は変わり選択肢が増え、人は前向きに変われることを発見し、「生きることは行動することではないか」という考えに至っています。

また、優秀賞の情報2年の林さんは伊坂幸太郎著『終末のフール』という本に出会いました。そして、たとえ困難に出会っても「とにかく生きる」ことで困難に立ち向かうことの重要性を知り、自らの人生を生きていく決意を新たにしています。

このように本と出会い、読み通し、読書感想文を書くことによって、本をいっそう深く理解し自分の感じ方、ものの見方、考え方を再認識するとともに、これまでの自分の生き方を振り返り、新しい自己を切り開いています。今回の入選者の場合、そのテーマを見ると上述の「生と死」のほか、情熱であり、友人関係、人間関係、将来の職業などでした。

最初に、テーマが情熱の作品を見ましょう。

情報1年・永岡さんの「アイデアの種」は、作者の絵本製作の実例を通してアイデアを求める熱い思いこそがアイデアの種になるということを見出しています。また、情報2年・中村さんの「理想と現実、そしてその先」は、困難に耐え、努力し、妥協しない勇気こそが理想を実現させるということを見出しています。そして、物質化学2年・森さんの「目標を持つことの重要性」は、居残り補習をきっかけに見失っていた目標を育て実現させた女子高専生の姿に森さんが共感し、目標を持って努力する気持ちを新たにしている過程を綴っています。

次は、友人関係、人間関係がテーマの作品です。

情報1年・矢野さんの「『8分音符のプレリュード』を読んで」は、優等生の主人公が自分より優れた転校生の登場に対して抱いたライバル心と嫉妬心の格闘を的確に読み取り、今の自分自身を見つめ直しています。また、機械2年・田村さんの「応援し、応援されること」は、母校の応援団を立て直すために奮闘する主人公の姿から、今、自分が周囲から応援されている存在であることに気づき、自らもエールを送る存在になりたいと思いを深めています。

最後は、テーマが職業観とでもいう作品です。

情報2年・石田さんの「できることを－『舟を編む』を読んで」は、面倒くさく地味と思われがちな辞書作りの話を読んだ感想文です。主人公は辞書作りの仕事が苦手で自分の適性に悩んでいましたが、自分の得意な交渉力を生かすことが自分の役割だと気づき、その悩みを解消していきました。このことから、石田さんは仕事への適性は有るか無いかではなく、自分の中に見つけて育てていくものだと考えるようになり、読んだ本との出会いに感謝しています。

こうしてみると、本を読むことが若い読者にとって大きな意義を持つことは言うまでもありませんが、さらに読書感想文を書くことを通じて新たな自己発見があり、自己変容が行われていることが分かります。

そこで、助言です。今回、書き上げた読書感想文をそのまま提出したあなたは、次回は書き上げた感想文をもう一度読み直し、よく推敲したうえで清書して提出することを実行してください。そうすると、本を読み通し考えたことであなたに起こった変化、成長がいっそう明確になり、読書感想文の読者にもそれがいっそう効果的に伝わるようになると思います。

第40回を迎える平成27年度の読書感想文コンクールへの主体的な応募を期待しています。

(国語担当：井上次夫)



読書感想文入賞作品

『晴天の迷いクジラ』 窪 美澄 著

生きること

—「晴天の迷いクジラ」を読んで—

物質化学工学科1年 三雲 理紗

「生きることを止めようとしていた。」私はこの文を読んで息が詰まった。本の後ろに書いてあるあらすじを読んだだけなのに、心の中で何かが溢れているみたいだった。これが私とこの本の出逢いだった。

デザイン会社で働く若い男性由人は、激務と彼女を失ったことにより、うつ病を発症。由人が勤める会社の社長野乃花は、潰れていく会社と共に死を決意した。そんな二人は死ぬ前にクジラを見ようと南の半島に向かっていった。その途中、母との関係で心を壊し死を選ぼうとしていた女子高生正子を拾う。

死に向かう三人が、このように出逢い絆を深め、何でも言い合える関係になっていく。本の世界で起こっている出来事だけど、私はそれを「奇跡だ」と思った。若干の羨ましさと、羨ましさからの嫉妬が私の脳内で浮かんで消えた。

私が中学生だった頃、ずっと笑顔浮かべている友達があった。彼女は本当によく笑う人だったから、精神病であることを聞かされても信じることができなかった。

彼女はいつしか部活にも学校行事にも参加しなくなった。活発な子だったから皆驚いて心配したけど、次第にそれもなくなっていった。

彼女は笑っている。でも私は彼女の笑顔には心が無いと感じるようになっていた。彼女に何が起こったのか、私は気になった、聞いたかった、話してほしかった。本の中の正子とは少し状況が違うけど、彼女と正子は似ていると思った。

正子には忍という友達が居た。正子と忍の二人は、はじめは仲があまりよくなかった。ある時正子はこう思った。「忍には話を聞いてほしい」と。

私は胸の奥がズキズキするのを覚えた。彼女もそう思っていたのかもしれない。もっと彼女の心の中に踏み込んでよかったのかもしれない。

苦しんでいる人を助けるのは難しいことだ。その人が何を求めているのか、見極めるのも大変だし、私みたいな人間がその人の心に入って行って許されるのか分からない。それでもなお、私は思う。行動しないと何も変わらない。変えることができない。由人、野乃花、正子の三人が死という一つの選択肢を選ぶ前にクジラを見に行った。そのことで生という

選択肢が増えた。行動することで自分の選択肢を増やしていく。そうすることで、人生が充実したものになる。生きることは行動することなのかもしれない。何も行動を起こさない人間は死んでいるのと一緒ではないか。少しそう思った。

ほんの少しの努力で人は変わることができるのかもしれない。もちろん、独りではできないことだ。ゆっくりでいい。ゆっくりでいいから、私は皆と一緒に前に進みたいと思った。

『アイデアはどこからやってくる?』 岩井 俊雄 著

アイデアの種

機械工学科1年 永岡 颯太

僕がこの本を手にとったのは、このタイトル「アイデアはどこからやってくる?」に興味を持ったからだ。それは自分自身が将来なるであろう技術者にとって「アイデア」というものがとても必要だと自分が考えているからだろう。「アイデアはどこからやってくる?」今の僕には、ぜんぜん分からない。そもそも「アイデア」とは何なのか?

そう考えながら、読み始めた。

作者岩井俊雄氏は「メディアアーティスト」で、映像玩具を発展させた作品「時間層Ⅱ」やCGを駆使した作品を制作するなど日本メディア界では有名な人だが、その才能が様々な分野で様々な人に評価されている。

その評価の一つが絵本製作だ。この絵本製作には、岩井氏の様々なアイデアが詰まっている。

そもそも絵本製作のきっかけは岩井氏の長女が数の数え方でつまづいているのを見たこと。

19から20へ、29から30へと数が繰り上がる仕組みが理解できず、きちんと言えてなかった姿を見て、この数の成り立ちを分かりやすく表した絵本を作ろうと思ったのだ。

岩井氏のアイデアはこれだけにとどまらず、数の成り立ちをよりわかりやすくするために、ページをめくるごとに段々数を大きくしたいという重いから「たてもの」を描くこと。

高さを迫力ある表現にしたいという思いから、従来、横開きしかない絵本を縦開きにするなど思いつき、今までにない縦開きの絵本「100かいだてのいえ」が完成した。僕はこのことを知り、どうしてもこの絵本が読んでみたくなった。この歳になって、絵本を読むとは思わなかったが、読んでみるとこの絵本は画期的な絵本だった。10階分を一見開きで表し、それぞれ10階ごとに住んでいる生き物を変えて

ある。それぞれの住人たちが生活している様子が本当に細かく丁寧に描かれていて、見ていてとても楽しい。また、縦開きにしたことで、本に家の高さ感が生まれ、階が上がっていく様子すなわち、数が上がっていく様子が視覚から分かりやすく入ってくる。この絵本がたくさんの子供たちの心をがちりつかんだのがとてもよく分かった。岩井氏の絵本に対するアイデアはこのあとも続き、多くの絵本が続編を並列的な考え方でシリーズ化していくのに対し、またも岩井氏は続編を前作とは対称的に描くアイデアを出し「ちか100かいだてのいえ」を作った。このアイデアは前作のときの試行錯誤が生んだといってもいい。前作の絵本試作のとき、高さを表現したくて合えて縦開きにしたのに、下から上へとページを開くようにしたところ、絵本を読んだときの感覚が下にながるといことが分かった、そこで岩井氏はこれを逆手にとって上から下へとページをめくることを思いついた。そして、上から下へとページを進めていく「100かいだてのいえ」と下から上へとページを進める続編「ちか100かいだてのいえ」が生まれた。

この本を読んで、「アイデアとは、「思いつき」「ひらめき」であり、それは必死に考えたからといって出るものではなく、むしろ何気ない日々の中に無数にあって、それに気付けるかどうかなのではないか」と思った。日々の生活の中で「好きなことをもっと良くしたい」と思う気持ちや「苦手なことを克服したい」と思う気持ち「困っている人を助けたい」という気持ち、そんな人が生きていく中で当たり前持つ感情の中に、アイデアの種があり、それに気付いた人だけが、その種を育てることが出来る。そんな気がしてならない。岩井氏が教えてくれたこの教えを胸にこれから技術者への道をしっかり歩んでいきたい。

『8分音符のプレリュード』 松本 裕子 著

8分音符のプレリュードを読んで

物質化学工学科1年 矢野 真綾

自分の身の回りに、何らかの分野で功績を残した人が現れたとしたら、自分はその人に対してどのような想いを抱くだろう。

たとえば、自分と同じ部活に、自分よりも実力を持った同級生がいるとする。自分は精一杯努力しているのだが、その同級生の足元にも及ばない。そんな人物に対して、自分は思うかと言うと、おそらく尊敬するのではなく嫉妬してしまうだろう。そのまま嫌ってしまうか、諦めて感心を向けないようにするか、それともそれを対抗心にしてライバル視するかは人それぞれであるので、嫉妬という感情を一

概に悪いものだと言い切ることはできない。しかし、嫉妬という言葉に悪いイメージが付きまとうことからみるに、その気持ちを悪い方向に転換してしまう人は少なくないようだ。

本作の主人公である、中学二年生の少女、秋山果南も同じ状況に置かれてしまった。彼女のクラスに、全日本ジュニア・ピアノ・コンクールで優勝したほどの少女が転入してきたのである。もっとも、主人公は根っからの優等生であり、今まで他人に嫉妬されることこそあっても他人を嫉妬するようなことはなかった。そのため、転入生に対しても嫉妬心を抱かなかった。それどころか、その世話役を引き受けて、新しい学校に早くなじむことができるように協力しようとしたまでである。それほどまで、彼女は優しく、純粋だったのだ。

しかし、転入生は彼女に冷たかった。いや、彼女に冷たいというよりは、周囲の皆に冷たく当たる、とげのある性格の持ち主だった。転入生は彼女に礼を言わないばかりか、誘ってもらった彼女のいる吹奏楽部の演奏を、耳ざわりだ、子どものお遊びだと侮辱したのだ。そこまで言われると、嫌な気持ちにならない人はいないだろう。彼女もついに、悪い心—本文中から語を借りると、どう黒い感情—ができてしまった。できでしまった、というよりは、気付いてしまったという方が適切かもしれない。彼女は、知らず知らずのうちに積み重なっていたそれに、気付いてしまったのである。あるいは、今まで必死に気付かないふりをしてきたのかもしれないが、どちらにせよ彼女は、はじめてそれと正面から向き合ってしまったのである。彼女が、そんな心を持ってしまった自分に対しての、強い自己嫌悪に陥ってしまったのは、言うまでもない。そして、転入生に対して怒りをぶつけてしまい、優等生の化けの皮が剥がれた、とうわさされるのもまた、言うまでもないだろう。

彼女もまた、嫉妬の心を悪い方向に向けてしまったのだ。転入生の言動は彼女の怒りを買うきっかけとなったが、すべて転入生のせいだとは決め付けられない。転入生から見れば、勝手に嫉妬して、勝手に暴走したおせっかいな人間に映るかもしれないからだ。

彼女は真剣で優しくまじめだったが、その優しさ故におせっかいにもなりえるし、そのまじめさ故に優等生であらなくてはならない、というプレッシャーを自分にかけてしまうのかもしれない。

自らをキャラクターに押し込める、ということは、見栄えはともあれ、内部では非常にきゅうくつな思いをしていることを忘れてはならない。それで耐えきれず爆発する、なんてことのないように、たまにはガス抜きなんてものも必要なのだ。

『あすなる三三七拍子』 重松 清

応援し、応援されること

機械工学科2年 田村 直人

この物語の中に出てくる登場人物の実際のモデルとなったのは、同志社大学応援団のOBだという。作者が応援団に興味を持つきっかけとなったのは、このOBとの出会いだった。作者は、自分の著書の出版発表イベントの担当者として、一生懸命自分のために動いてくれたことから、彼と仲良くなり、その彼を好きになり、彼のことが書きたくて、応援団についてのこのストーリーを作り上げたそう。実は、私の母がそのOBのことを知っていた。母は、そのOBの数代下の後輩にあたり、青春時代を、この応援団で送ったのだ。

私は、数年前、母に連れられ、小説中にも登場する、ライバル校との定期戦（立命館との野球の定期戦）を観に行ったことがある。正直、その時は、応援団がどんなものかなど考えもしなかったが、応援席が一丸となって選手を応援するあの独特な雰囲気は、鮮明な記憶として、今も私の心に残っている。夕暮れのスタンドで、こだまし合う両校の応援。吹奏楽の響き。重い団旗をビクともせず支える姿、鼓膜が破れそうな程の音の太鼓、表情一つ変えず、観客に向き、エールを振り続ける団長の姿。藤巻大介や野口健太、保阪翔、松下沙耶、彼らの姿が、私の記憶の中の応援団と重なった。

四十五歳の大介は、エール商事の総務課長であるが、リストラ候補にあげられていた。エール商事社長は、かつて応援団団長を務め、現応援団OB会幹事長である。八十六年続いた応援団指導部は、団員不足の為、存亡の危機にさらされていた。応援団をこよなく愛し、この危機を救うべく、思いついたのが、大介を団長にして、応援団を建て直すというもの。これは、会社の辞令、いや、むしろ脅迫とも言える。サラリーマン生活を一時中断して、大学を受験させ、団長として団を建て直す。成功すれば出世を約束するという、リストラと引き換えの条件に、大介は困惑するも、家のローンと娘の学費のために、それをのむのだ。

応援団指導部の団員不足は、母がいた当時から深刻な問題だったようで、半強制的に入団させられた学生もいたそう。苛酷な練習、理不尽とも言える程の厳しい上下関係と団のルール、自らすすんで入団する学生がいないのは当然とも思える。しかし、母によれば、そんな悪いことばかりではないという。確かに、他人の応援に時間やお金をかけ、何のためにそんな一生懸命頑張るのかと周囲から言われたり、自

分でも思ったことはあったという。しかし、四年間の応援活動を通じて得たものは大きく、人一倍情熱にあふれた団員達は、互いのことを思いやり、はげます優しさを知り、厳しさに打ち勝つ力を身につけて巣立っていくという。

大介が団長を務めたのは半年だった。任務を終え会社へ戻るまでの半年で、彼の人生観は変わった。同い年のOBや世代の違う学生達とのつき合いの中で、互いの立場を理解しようという寄り添いの心が生まれる。それが、彼の今までの人間関係をも回復させるのだ。

彼はこれを通じて、人生の中で、応援し合う意味、大切さを知る。

「みんなもどうか、自分のことを一生応援してくれる人に出会ってくれ！自分が一生応援したくなる人に出会ってくれ！」

彼は、応援団を去る最後の舞台上でメッセージを伝えた。人は一人では生きていけないというが、常に自分という存在は、周りの人に支えられ、応援されながら生きていることに改めて気が付いた。今の自分ははたして、周りの人にエールを送ることができているだろうか。そうでありたいものだ。

『限界集落株式会社』 黒野 伸一 著

理想と現実、そしてその先

機械工学科2年 中村 友哉

会社を辞めて事業を興そう。その前に、一度都会から離れて田舎でゆっくりと過ごそう…。そんな気持ちで父の実家のある止村にやってきた主人公は村の現状を知る。村人の数は三桁を切り、その半数以上が高齢者という限界集落、村の子供の願いを聞き主人公はこの限界集落を再生する為に農業の企業を立ち上げることを決意する。

誰も理想を追いかけた事が一度はあるだろう。しかし、その理想を現実にした人は数少ない。そもそも無茶な理想だった、神様が自分を見捨てた、駄目だった人は様々な言い訳をいう。そして皆がそうだからという理由で、進学・就職していく。それを駄目だと言うことは自分にはできない。自分は理想を本気で追いかけた事がまだない。良く言えば現実的、悪く言えば物事に冷めている。自分が傷ついたり、周りに嫌われたりすることを避けたい。自分にとっては理想を追うより、堅実に生きて親を楽にしたいと子供にしてはませたことを考えていたのかもしれない。しかし、周りから嫌われず、しっかりお金を稼ぐという事自体が理想だと最近考えるように

なっている。

結局、理想と現実の境界は曖昧なものだと思う。しかしこれは、「一方的な方向で」である。つまり、現実だと思っていた事がいつの間にか理想になっていることはあっても、理想が自然に現実になることはほぼないということだ。

では、理想を現実に行えるのは生まれながらに才能を持っているか、運がいい時だけなのか。それは違う。理想を実現する為に一番大事なのが運や才能ではないと強く感じた。

物語の中で主人公は数々の困難にぶつかった。意見の分かれる村人達、野菜の販売先の確保、敵対してくる自分達より豊かな農村。普通ならば諦めてもおかしくない状況を主人公や村人達は耐え抜いた。耐えることで、困難に負けないことで自分達の理想が叶うと本気で信じる。誰もができそうなことで、誰もができないこと。失敗すれば、先にあるのは悲しみや苦しみである。それでも、可能性の低い成功を信じて自分ができること、皆でできることを全て出し切る。その勇気が、その覚悟が理想を叶える唯一の方法で、少数しか叶えることができない最大の理由ではないだろうか。

誰もが全ての理想を叶えた世界は絶対に有り得ない。もしそんな世界になれば、社会の基盤が崩れて生活が成り立たなくなってしまう。だから、多数の人は夢描いた未来を歩むことはできない。そして現実を直視する。この時が理想を叶えられなかった人にとっての最大の分かれ道だと思う。現実を直視し、それで妥協するのか、それとも、その現実の中で理想に近づけようと努力するのか。前者なら失敗の確率はほぼないだろうが、面白味もあまりないだろう。後者ならば人生が楽しく感じられるかもしれないが、失敗の可能性があり二度と立ち直れない可能性もある。

成功を信じるか、それとも失敗を避けるか。人それぞれの考え方があり、どちらが正解ということでもない。しかし、理想を追い求める姿は輝くものであり、そして理想を叶えた人がいる。これだけは無視してはいけない、理想を馬鹿にしてはいけない絶対的な理由であると思う。

『舟を編む』 三浦 しおん 著

できることを — 「舟を編む」を読んで — 情報工学科2年 石田 豊実

辞書をつくる話。さぞかし重たい話なんだろうと思っていたが、そうでもなかった。登場人物には変人がいて、お調子者がいて、頑固オヤジ、仕事で

きる人、おじいさんもいて..。その人達の絡みはとても面白かった。

この本を読んで知らないことをたくさん知れた。辞書について今まで考えたことはなかったからつくる工程の話は新しかった。とんでもなく地味で面倒くさい作業だなと感じた。

この本では、多くの登場人物が自分がこの仕事に向いているのかと悩んでいる。物語が進むにつれて、解決していくことになる。僕でも想像しやすいことだったから読んでいて納得できることがあった。

自分が将来する仕事自分が向いているかなんて分からない。その仕事が好きだったとしても、そうでもなかったとしても向き不向きはあるはずだ。僕がもし、就職した時にこの仕事向いてないなと思ってしまったら僕はどうすればよいのか考えてみると、おそらく、とても悩むし、それだけで仕事を辞める理由になるかもしれないと思った。この本の中でも同じ悩みを抱える西岡という人物がいる。西岡の性格は軽口ばかりのお調子者。辞書をつくる仕事は当然地味な作業で、黙々と仕事をしなければならぬ。明らかに西岡の性格には合わない。西岡以外は皆、地味な作業ができるのでいつも西岡は仕事の邪魔をするような存在になってしまうのだった。誰がどう見ても辞書の仕事には向いていないと思うし西岡自身もそれについて悩んだ。自分がいなくなっても仕事は進む、そう考えた。しかしある時この考えが変わった。どう変わったか。それは、「自分にできることをしよう。例えそれが大きなことでなくても。」だった。西岡は対人スキル、特に交渉するのが上手かった。実は、辞書をつくるためには地味な作業だけでは成り立たない。辞書には色んな分野の言葉を載せるために多分野の専門家に言葉の意味を書いてもらわなければならない。そこで西岡は自分の持てる力（教授ごとの性格などを書いたメモ）を交渉の苦手な同僚のために残すことに決めた。

こうして自分の役割を見つけて仕事をするというのは重要なことだと知った。自分には少し不向きな仕事でも、自分にできることはあるはずだからそれを探して実行しようと思えた。「自分にできることをしよう」、簡単に思いつくことかもしれないが、それを本の中で具体的に触れることができて本当によかったと思う。そして、将来の悩みをここで解決できたこの本に感謝したい。

最後にもう一つ。実はこの本、カバーが作中に出てくる主人公達が長い年月をかけて作りあげた辞書「大渡海」と同じデザインになっている。大渡海のデザインの描写を見た時は驚いた。そして「大渡海」という名前。考えてみれば当たり前なこと、国語辞典に名前があることも知らなかった..。この名前、

「辞書は言葉の海を旅する舟である。」から来ている。なるほどなあ。題名までつながってくるとは。ほかにも聞いたことのないような語句など作中には思わず国語辞典を開けたくなるような所がいたる所にみられた。設定がよく練られているなあと心の底から関心させられる作品でした。いつかまたこのような作品に出会いたい、そう思った。

『終末のフール』 伊坂 幸太郎 著

「死んでも死なない」という決意

—「終末のフール」を読んで—

情報工学科2年 林 大泰

この本の物語は寿命があと3年という話から始まる。人の寿命ではなく、世界の寿命が、だ。

3年後に世界は滅亡する、そういった状況下で様々な思いや悩みを持った8人の登場人物の生き様が短編小説としてそれぞれに描かれている。正確には「8年後に小惑星が地球に衝突し世界は滅亡する、と告げられた日から5年後の世界」という設定。「明日」などではなく「3年後」という微妙に残された時間の中で人はどのように生きていくべきなのだろうか。

この本の8作目の話「深海のポール」は、こんな世界の中でレンタルビデオ屋を経営する主人公が友人や家族と普段通りにふれあい、世界の終わりについて考える様子が描かれている。

最後の話でもあるからか「生きる」ということに対しての言葉が多く散りばめられているように私は感じた。

そして、その中のいくつかのセリフに心を惹かれ、考えさせられた。

『頑張って、とにかく、生きろ』。暴漢に立ち向かった父が自分に言った最期の言葉だ、と、ある客が主人公に言った言葉。私はこの「とにかく」の部分にとてつもない力強さを覚えた。

生きることの困難さを「とにかく」で端的に表している。それがたとえ世界が終わってしまうとしても、決して諦めずに生きる様がこのセリフには含まれているのではないか。

そしてこれとは別に、『じたばたして、足搔いて、もがいて。生き残るのってそういうのだよ、きつとさ』と主人公の妻が言ったセリフ。先程述べた、決して諦めずに生きる様というのはまさしくこのセリフなのでは無いかと思う。

「じたばたして、足搔いて、もがいて」と「生き残る」、どちらも生きることの必死さを感じ取れる言葉だ。

そこから連想される姿は生々しく、みっともないかもしれない、だが必死に生きることは本当にみっともないだろうか。

少なくとも私はそうは思わない。ほぼ全ての人は生きたいと思っているだろうし、それが当たり前だ。

作中でも『死に物狂いで生きるのは、権利じゃなくて、義務だ』と主人公の友人が言う。

「生きるのは義務」、これに違いない。人は必死に生きなければならない、義務なのだ。

ましてやこれを放棄することなどは許されないのである。

この物語の最後のシーン、主人公の娘が『死んでも死なない』と口ずさむ。

このセリフこそ、人が生きるという必死さを最も強く表現していると思う。

そのままの意味だと難解な言葉だが、私が考えるのは「たとえ死ぬほどの恐怖や困難があっても生き抜く」という意味だ。

もはや「何があっても生きろ」と命令されているようなものだが、この場合、自分で生きると決心していることに意味がある。

人は生きなければならないが、生きることを強制されているわけではない。

自分が生きるということを自分で決める、これが大事なのだと、私は思う。

もし私がこの本のような状況ならどうするだろう。

残りの時間で普段はできないようなことをしているかもしれないし、普段通りに過ごすかもしれない、まあ自分から生きることを放棄することはないだろうが、分からない。

自分が何をやるかなんて、その時が実際に来るまで誰もわからないのだ。

もし人生の中で迷ったことがあっても、とりあえず生きてみる、この姿勢が大事だとこの本から学んだ。

これから先、私には困難や選択といった迷いが必ずあるだろう。ただ、何があっても私は諦めない。生きてみる。

『ロボコン』 大崎 知仁 著

目標を持つことの重要性

物質化学工学科2年 森 貴典

自分は高専生です。高専というのは五年制で大学受験がなく、普通の進学校とは違い専門的な教育を受けることができます。これは高専に来る生徒は自分のやりたいことがある程度決まっている人であることを意味しています。しかし中には「就職率が高かった」や「高専からの大学編入は普通に大学受験するより楽そう」など様々な動機の人があります。高専で学ぶ分野に興味がわかないと失敗してしまう可能性は高いと思います。

物語の主人公である女子高専生の葉沢里美はなんとなくで高専に来てしまった一人です。彼女は授業についていけず、打ち込めることを見つけることもできずに学校生活を送っていました。しかし提出した製作実験の課題である手作りのロボットのできが悪かったため、ロボット工学担当の図師先生に呼びだされてしまいます。そして居残り補習を回避するためにロボコンに参加します。そして変わり者しかないメンバーと共に大会に挑みます。

僕自身が高専に来た理由には彼女に近い部分があります。周りに高専という所もあると教えてもらい、自分自身も理科が好きだったのと公立の入試とかぶらないから受けたといった感じです。高専に入り専門科目が増えていくとレポート等の課題も増え、そのレポートで最低限のことを書いて提出するという作業をただこなすようにすごしていました。

このように、僕と里美は明確な目的を持たずに生活していたという共通点がありました。しかし里美は半ば強引に参加させられたロボコンをきっかけに変わっていきます。

彼女がロボコンに参加させられた日はロボコンの地区大会の二日前であり、いきなり当日のロボットの操縦者を任されてしまいます。結果はロボットが六十パーセントの出来で未完成だったこともあって、一回戦で敗退してしまいました。しかしアイデアが評価され全国大会に推薦されます。この時に地区大会に参加したため居残りは免除されるのですが、

これまで乗り気ではなかった彼女が全国大会に出ることを決意します。彼女はロボコンを本気で取り組んで、何に対しても無気力だった自分を変えようとしたのです。それからあらゆる問題を乗り越えて他のチームメンバーとの絆を深めていきます。そして全国大会でついに優勝します。

この作品の登場人物がロボコンという目標にむかって努力する姿を見て、自分に今欠けているものだと感じました。僕はその時にしなければならないことをこなすだけで終わっていました。しかし、日々の生活で目標を立てて行動することでモチベーションがうまれて、過ぎていくだけだった時間が充実したものになりました。そもそも目標を立ててそれにむかって頑張ることは人が自然とやっていることだと思います。僕の場合は目標を設定していても課題等の忙しさを理由に努力することを怠り、またどのようにすれば目標に近づくかを考えることを放棄していたと思います。

これまで自分がこんな疲弊した生活を送っているのは高専に来てしまったからだと考えたことも少しありました。しかしそれは違いました。もし違う学校に行ったとしても同じことを考えていただろうと思います。やはり自分が物事にどのように取り組むかによって変わるものです。僕はこれから高専で学ぶことを無駄にしないためにも、自分で考えて直面するであろう問題にも向き合っていきたいです。

図書館の利用にあたっての注意

図書館の本は大事に扱きましょう

時々、付箋が付いたままだったり、中に書き込みがしてあったりする専門書が返却されます。誰か他の人が貸してくれた本に、付箋を付けたまま返しますか？中に書き込みをしますか？図書館の本は、あくまで借り物です。皆の本です。そのことを分かったうえで利用してください。

図書館では静かにしましょう

小声で勉強を教え合うのは構いませんが、時々大きな私語や笑い声が聞こえます。しばらく続くようであれば、注意しに行きます。息抜きでちょっとお喋りしたい気持ちは分かります。でも、静かな館内に、貴方たちだけの声が響き渡っていませんか？貴方が一人で勉強している時、うるさくしている人たちに苛々したことはありませんか？一人一人が気を付けましょう。

返却期限を守ってください

期限内に読み切れなかった本（雑誌）は、他の人に予約されていなければ返却期限を延長することができます。手続きをせず、そのままズルズルと借り続けることはやめましょう。図書延滞があると、新たな貸し出しはできません。

学生図書委員会 活動報告ほか

三年間の図書委員としての活動を通して

5I 倉橋 亮

三年という長い期間図書委員を務めていたこともあり、この原稿の執筆依頼を受けました。今年度で卒業となるので、図書委員最後の活動として、その締めくくりも兼ねて今までの活動内容を中心に書かせていただきます。

図書委員会は、基本的に月に一度の頻度で活動があることと、他の委員会の中でも多く予算が割り当てられていることが特徴です。月に一度、場合によってはそれ以上の頻度で活動があるので大変に思うかもしれませんが、その分私にとってはやりがいのある活動でした。

特にやりがいを感じたのは、図書委員一年目で、私が代表となって行った雑誌プロジェクトでした。このプロジェクトは、図書館に在庫が無かった女子学生向けの雑誌や、学生から人気を集めそうな雑誌を委員でいくらか選定し、そこから全校生徒対象のアンケートにより、図書館で定期購読する雑誌を決める活動でした。投票の結果、「CanCam」と「アニメディア」の2種類の雑誌に決まりました。どちらの雑誌もそれなりに読んでくれる人がいると聞くので、このプロジェクトは成功だったと感じています。

また、図書委員会で最も大きな活動といえば、年度に二回あるブックハンティングで、図書館に入れる本を選書することです。この活動では、クラスの希望調査と図書館の在庫確認のもと購入リストを作成します。そして、購入条件と予算の範囲内であるかを査定してから梅田にある「ジュンク堂書店 大阪本店」まで、リストにある本の購入に行きます。ブックハンティングでは、図書館に自分が入れてみたいと思った本を、条件と予算の範囲内であれば自由に入れることができたりするので、これは図書委員の特権だと思います。私のクラスの場合は毎回、希望がほとんど出なかったのも、予算ギリギリまで自分が入りたい本を中心に購入しました。その結果、今年度だけでも15冊近く図書館に入りました。ただ自分好みの本だけではなく、就職活動や資格試験対策であったらいいなと思った本、専門分野で後輩の役に立ちそうな本などを吟味して購入したので、それらの本がみなさんの役に立てればいいなと思っています。

図書委員としての三年間を振り返れば色々と思いつかぶのですが、ここに書く内容としては字数制限上、これぐらいにさせていただきます。

デザインとテクノロジーの調和

5I 田中 勇気

みなさん、こんにちは。今回は、ブックハンティングについてみなさんにお話にしようと思います。

図書委員の一員として、このような形で図書館だよりの執筆の機会をいただいたこと、非常に光栄に思います。

僕はこれまでに図書委員としてブックハンティングに4回参加させていただきましたが、大阪のジュンク堂書店の蔵書の豊富さには毎回圧倒させられてしまいます。

情報工学科に所属しているということもあり、リストに挙げられている本や自分の関心がある本には情報工学系統のものが多く、ジュンク堂ではまず専門書の方に足が向きます。

一口に情報工学と言っても様々な分野がありますが、前回のブックハンティングで興味深い本を発見したのでそれについて少し書こうと思います。

「アップルのデザイン戦略」——日経デザインから出版されている、Apple社の製品に関してデザインの視点から書かれている本です。

スマートフォンの先駆けとなったiPhoneはなぜ爆発的に売れたのか、iPhoneの何が人々を惹きつけるのか、この本ではApple社が製品のデザインにどれだけの労力をかけているかが豊富な図と共に分かりやすく説明されています。

この本を読んで分かったことですがApple社は製品の外観だけではなく、内部のネジ穴の角度や電子部品の配列などの、ユーザが普段見ることのない細部にまでデザインにこだわっています。

比較としてMicrosoft社のSurfaceが挙げられていましたが、Surfaceは加圧式の極薄キーボードやマグネシウム合金製の筐体など外観デザインには遜色ないものの、内部の基盤には無造作にシールが貼り付けられているなど見えない所にはあまり手がかけられていません。

内部に関してはユーザ側からしてみれば製品を分解することはほとんどないのであまり関係ありませんが、Apple社は外装の化粧箱やApple Storeの製品の陳列にまでデザインのこだわりを持っているようです。

他にもApple社が取得した特許から、これからiPhoneはどう変わっていくか、ウェアラブル端末として来年春に発売される予定のApple Watch（正式発表前に執筆されたものなので書籍ではiWatchと記述されている）はどのような製品になるかなどの予測が書かれており、非常に興味深い内容となっていました。

この本はもちろん、このシリーズの1つ前の「アップルのデザイン」という本も図書館にありますので興味のある方は一度読んでみてはいかがでしょうか。

最後になりましたが、年に2回行なわれるブックハンティングは新しい本に出会えるきっかけにもなるので、本に興味のある方は是非一度参加されることをお勧めします。



図書委員会計として活動して

41 川口 涼

4年生になってから1年間初めての委員会ですさらに初めての会計という役員として活動させていただきました。図書委員としての活動で自分が体験したのはブックハンティングくらいでしたが他にも雑誌に関するものや読書週間など普段図書館を利用していても気付かなかった催しがいくつもあって新鮮でした。その中でもブックハンティングでは図書館の本を選んだり先生方が専門の本を選んでいたりするのを見られたりして普段はやらないような経験ができて楽しかったです。他にも図書委員の予算の多さや新しく入れる図書の却下理由など図書委員でなければ知れないようなことも知れて面白かったです。ブックハンティングではクラスでの希望が少なかったこともあり意外と自分の好きな本も選べたのでまた機会があれば参加してみたいです。

そして図書委員会計としても働かせてもらい、仕事自体は少なく負担は少ないものでしたが事務的な仕事だけで楽しくはなかったりとこちらも色々新鮮な体験ができました。ただ、初めての役員ということで全体の委員会の前に行く打ち合わせや領収証などの書類の扱いや書き方、事務手続きの煩雑さなど今まで触れなかったものに触れることができているいい経験になったと思います。これからいろいろな事務手続きが増えてきそうな自分にとってはこの一年で経験したことを生かして頑張っていきたいと思います。

今回は図書委員の最大のイベントであるともいえる（僕は最大のイベントだと思っている）、ブックハンティングについて皆さんにお話しようと思います。ブックハンティングとは、年に2回行われる図書委員会の活動です。これは高専の図書館に学生達が、学生達のために本を増やす絶好のチャンスでもあります。こういう参考書・文献が欲しいが、個人では高く買えない、また近くの書店で取り扱っていない、などといった場合にこのブックハンティングを活用してください。

このブックハンティングがどのように行われているかという、まず事前に各クラスの図書委員が、クラスで希望図書を募集しまとめます。各クラスの図書委員は、この希望図書がすでに図書館にあるものではないか、また募集条件を満たしているか（漫画や雑誌などはブックハンティングでは取り扱わない）、などを調査します。そうして集まった希望図書は担当教員と図書委員で、予算内に収まるか、また図書館で貸し出すに相応しいものであるかなどを審査します。無事審査をクリアした希望図書は、図書委員が梅田にある大型の書店「ジュンク堂」まで購入しに行きます。

ブックハンティングでは、大型の書店に行くことができるのでとても楽しいです。僕は図書委員になって初めてそのような大型の書店に行くことができたので、新鮮な体験になりました。また、様々な本に囲まれ、目的の本を探し出す作業は本が好きの人にはたまらないでしょう。そして、希望図書を見つけ所定の位置に提出した時点で、図書委員としての活動は終わりなので、そのあとに自分の欲しい本をゆっくり探すこともできます。今までに見たことの無いような本に出会ういい機会です。このような素晴らしい経験ができるので、皆さんも是非図書委員として活動してみてください。

奈良高専図書館は一般の方も利用できます



奈良工業高等専門学校図書館は、本校教職員・学生のみではなく、教育・研究に支障のない範囲において、利用を希望される一般の皆様にも図書館資料の閲覧・貸出を行っています。

専門書だけでなく、小説や英語漫画、新聞や雑誌等もあります。

保護者や兄弟姉妹等ご家族の皆様はもちろん、他校のお友達や出身中学校での後輩の皆様にもぜひおすすめして下さい。

所蔵している図書館資料は本校図書館Webで自宅のパソコンやスマートフォン等で検索できます。

(URLは裏表紙下部をご覧ください)



情報メディア教育センターの4年間

情報メディア教育センター長 矢尾 匡永

情報メディア教育センター長を務めさせていただいて4年を数え、本年度でセンター長を退任します。よい機会ですので、この4年間の情報メディア教育センターの活動を写真で振り返ってみたいと思います。

4年前の3月11日に東日本大震災が発生しました。その年に開催された全国図書館大会では東北の図書館の惨状が報告されていました。幸い、東北の図書館内での人的被害は殆どありませんでした。本校でも、年度末までには**書棚の耐震補強**を完了しました。また、原子力発電所の運転停止で、電燈の消灯、パソコンディスプレイをデフォルトでオフにすることなど**省エネルギー**に努めました。

インターネットの普及と本離れが危惧されている中、少しでも学生に近い図書館を目指して、継続的な**購入雑誌の見直し**を始めました。利用の少ない雑誌数種類を選び、1年間継続して観察し、より有用な雑誌に入れ替える活動で、学生図書委員会が主として取組んでくれました。この一環として、女子学生に人気のある雑誌の購入を図書館利用学生の投票により選ぶ**「総選挙」**を実施しました。ブックハンティング、読書週間などの活動を通して、学生図書委員会は年々活発になっています。

図書館に注意を引くのが目的で、老朽化したブラインドの取り換えの機会を利用して、**カラーブラインド**を窓に並べました。

総合情報センターでは、先進的な**ファイアーウォール**の導入、**教育用電子計算機システム**の更新および**無線LAN**の一部運用の開始などを行いました。これに伴い、横長のディスプレイの導入、横長のビデオプロジェクター、電子計算機室のOAフロア化と内壁改修（3月末予定）を実施しました。

ロボットコンテスト、プログラミングコンテスト、本校で実施しているチャレンジプロジェクトなどの学生の活動を高専際・科学の祭典などのイベントを利用して一堂に集め、プレゼンテーションなどを競う**メディアコンペティション**を始めました。メディアコンペティションを通して、学生の活動内容を紹介し記録・收藏する**図書館アーカイブ**（図書館ホームページにて閲覧できます。）を創設しました。

図書館・総合情報センターの**ホームページ**を更新しました。更新により、新着本の紹介、会館・閉館の情報、電子化した研究紀要の掲載、図書館アーカイブなどの更新を活発に行うようにしました。一度ホームページを開いてみてください。新しい、資料との出会いが生まれるかもしれません。

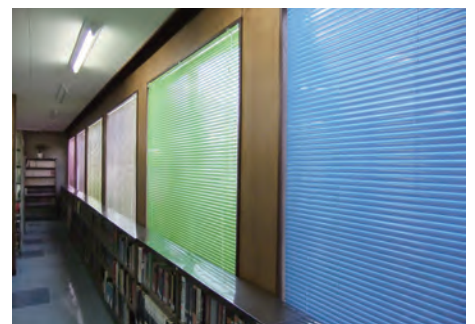
最後になりましたが、この4年間、ご支援ご協力頂きました皆様に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。



書棚と書棚を連結する耐震補強



「総選挙」で女子学生の為の候補雑誌に見入る男子学生



グラデーションに配列したカラーブラインド



更新された教育用電子計算機の運用開始



メディアコンペティションで熱心にプレゼンテーションする展示説明者



Information



読書週間

全国の読書週間にあわせ、今年度も11月初旬に学生図書委員会の活動として読書週間の展示を行いました。

今年度のテーマは、本校学生にも関連が深い「資格検定試験に関する本」となっています。関連する書籍を並べ、飾りつけを行い、展示書籍を使って答えを探すクイズや図書館の利用に関するアンケートも行いました。

展示した書籍は読書週間終了後も図書館内での閲覧や貸出が可能です。ぜひこれらを利用して、様々なスキルを身につけてみてください。



ブックハンティング11月

恒例のブックハンティングを11月15日（土）14：00から2時間ほど、大阪堂島のジュンク堂書店大阪本店で行いました。



本科学生25名のほか専攻科生1名、教職員11名が参加し、約210冊の図書を購入しました。

第3回メディアコンペティション

本校図書館では、学生チャレンジプロジェクトやロボコン・プロコンといった学生の主体的な取り組みに対する相互的な意見交換の場として、「奈良高専メディアコンペティション」を開催しています。今年度も高専祭の科展の1つとして各団体によるポスター展示や実演を行っており、一般の来訪者をはじめ多数の学生や教職員に来場頂きました。来場者のアンケートによって選ばれた上位3位までの団体につきましては、1月5日（月）に表彰を行っております（5ページの写真をご覧ください。）

出展したポスターは図書館入口付近に掲示してありますので、お時間のあるときに足を運んで頂ければと思います。図書館のホームページにも掲載する予定です。



編集後記

図書館だより 72号にたくさんの記事をご寄稿頂きましてありがとうございます。改めまして、お礼申し上げます。

来年度以降も、皆様のご支援・ご協力のもと、ますます活発な図書館を目指していく予定です。

今後ともどうぞよろしくお願い致します。

(図書館)



奈良工業高等専門学校 図書館

〒639-1080 大和郡山市矢田町 22

TEL 0743-55-6015

URL <http://www.nara-k.ac.jp/nncst-library/>

リサイクル適性 (A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。